

# 新基地建設反対名護共同センター ニュース

## 新基地反対「人間の鎖」に1200人余



玉城デニー知事はメッセージを寄せ、相次ぎ発覚した米兵による性的暴行事件について「綱紀粛正が行き届いてない」というゆゆしき事態。激しい怒りを覚える」と訴えました。

軍事同盟で戦争を止める事が出来ないのは、ウクライナやガザ地区で証明されています。人間の鎖で軍事同盟を取り払うしかありません。

オール沖縄会議の稲嶺進共同代表は、これまで起きた米軍関連の事件事故を列挙し、「目も耳も覆いたくなる現状だ。植民地支配そのものが具現化されている」と糾弾し、新基地建設阻止に向け、「強権政治をわれわれは許さない。負けないし、諦めない」と力説しました。

辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議は、七月六日(土)に米軍キャンプシユラブゲート前で「第四三回県民大行動」を開催。座り込み開始から十年目となり二部形式で行われました。

第一部は、午前十時半から十時五十分まで、基地のフェンスに沿ってメインゲートから新ゲート(現在の土砂搬入口)まで約一kmを人間の鎖で繋ぎました。

第二部は、午前十一時から十二時まで辺野古ゲート前集会でした。

### ゲート前座り込み抗議 十年目に突入

## 原水爆禁止国民平和大行進 沖縄出発

原水爆禁止国民平和大行進は、1958年に第4回世界大会(東京)をめざして広島から開始され、今年67回目を迎えます。国民平和大行進は全国8割の自治体を通り、10万人以上が参加する草の根の反核運動として発展・定着し、原水爆禁止世界大会成功の基盤を築き、核兵器廃絶の国民的共同をひろげてきました。

ウクライナやガザで侵略と住民虐殺の戦争がやまず、核兵器での脅しや増強・「近代化」が続く一方で、核兵器禁止条約の存在感が増し、世界各地でストップ戦争、国連憲章守れ、核兵器なくせの声が大きく広がっています。

核兵器禁止条約の批准国はこの3年で70、署名国は93か国となり、世界の過半数に達しようとしています。いま、核兵器のない世界のための努力がさらに大きく求められています。

1954年3月、太平洋ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験を機に、日本全国で原水爆禁止を求める行動が大きくひろがって、今年で70年になります。あのビキニ被災でのたたかいで、日本の国民は有権者の過半数3200万筆の署名を集め、原水爆禁止運動を創り出しました。署名が世界を動かし、核兵器使用の手を抑え、その力が核兵器禁止条約を生み出しました。

その教訓を今に生かし、私たちは今年、「ビキニ水爆被災70年から広島・長崎被爆80年へー核兵器のない世界、非核平和の日本の実現」をめざして、8月6日広島、8月9日長崎の原水爆禁止2024に向けて歩きます。

そのために2024年国民平和大行進は、全国すべての市区町村で、職場、地域、学園で協力を広げ、被爆者の証言を聞き、原爆展の開催や被爆の実相を伝え、署名を集

め、広島、長崎をめざします。原水爆の禁止を求めて誰もが立ち上がった、あの「ビキニのたたかいのように」が、今年の大行進の合言葉です。

沖縄において「ジュゴンと自然を守れ」で今年も闘いが続いている名護市辺野古を出発し、日程は6月17日(月)～6月22日(土)県内各地で核兵器の緊急廃絶を訴えて平和行進を行いました。

原水爆禁止国民平和行進沖縄実行委員会  
事務局長 佐事安夫



### 安和での抗議活動中に死亡・重傷交通事故

名護市塩川・安和での抗議活動について、危険を危ぶむ声は毎日ありました。十分に注意するようにと、誰もが口にし、それぞれに言い聞かせながら、それでも、私たちに出来る最後の手段として牛歩を続けてきました。政府が辺野古新基地建設を断念するまで、これからも続けざるを得ません。事故の無いようにと、現場の誰もが願っていましたが、最悪の形で起こってしまいました。

六月二八日金曜日、私は九時過ぎに安和から帰ります。帰り際、出口で折り畳み椅子に座ってチェックをしている顔馴染みの方に挨拶をしました。辺野古ゲート前でも度々顔を合わせ一緒に歌いました。毎週金曜日は安和に来ていつも手作りのパンを頂きました。その方が、今回事故に遭われたOさんでした。後から事故があったと聞いて、しばらくその方とは結びつきませんでした。結び付いた時に、新たな怒りとやりきれなさに襲われました。警備員さんが亡くなったと聞いた時から、なぜそんな事かと思いつきながらも、やはり起こってしまったか、という気持ちを捨てきれませんでした。歩行者の安全より、ダンプを数多く通す事を優先する誘導である事を、日々思い知らされてきました。「車輛が通ります。歩行者は速やかに横断してください」とマイクで言われる度に、「歩行者優先でございませよ。年寄りやダンプを急がせると事故のもとですよ。車は安全に止まってください」と返して来ました。

今回の事故には、事故を起こすだけの数々の要因がありました。一番の責任はダンプの運行のスピードアップを目指して、安全をおろそかにした誘導を警備員に強いた沖縄防衛局と運送会社の上層部にあると、私は考えます。一定のルールに基づいて、安全を保ちながらの抗議行動は、それが、歩行者の隙をついて1台でも多く通過させようとする誘導が度々行われるようになりました。

今回事故が起きた出口側には信号がありません。より一層の安全確認が、誘導する警備員にも運転手にも求められます。今回、その一定のルールを破って、連続してダンプを出そうと、待機していたダンプに国道に出るようになり、誘導の警備員が指示をしたといえます。運転手が焦らずに左側をしっかりと確認すれば、大人二人が立っているのですから、全くの死角とはならないはずですが、それを怠って、警備員の合図を見て、焦って発進したのだらうと思われれます。実際、運転手の第一声は「ALSOOK」の指示に従ったのだ」との事だったと聞いています。

県民の必死の願いを無視して、力で押さえつけて無理やり工事を進めて来た、そのやり方そのものが原因で起こってしまった事故だと私は考えています。もう二度と、このような国策の犠牲者を出してはなりません。当然予想されたように、抗議行動そのものに責任を擦り付ける論調が、既に出てくると聞きます。そのような攻撃に臆する事なく、沖縄から基地を無くすために、これからも頑張っていく決意です。どうか皆様の変わらぬ応援を心からお願致します。

(名護市在住 Iさん)